

No.3025

「PPN9 東京：第9回西アジア新石器時代石器研究国際会議」

(PPN9-Tokyo: The 9th International Conference on the Pre-Pottery Neolithic Chipped and Ground Stone Industries of the Near East)

東京大学総合研究博物館

教授

西秋 良宏

西アジアの新石器時代では今から1万年以上も前、世界で初めて食料生産経済が始まりました。長く続いた狩猟採集経済からの転換はその後の世界の人類史を決定づける出来事でもあったため、その契機や発展のプロセスについての考古学研究は国際的な関心を集めています。

この問題を石器文化の点から議論しようとする研究集会が PPN (Pre-Pottery Neolithic) 国際会議です。なぜ石器かと言えば、それが、当時の利器の中心にあったからです。この会議は1993年の第1回ベルリン大会以降、ヨーロッパを中心に8回開催されてきました。りそなアジア・オセアニア財団等の助成を得て実現した今回の会議 (PPN9-Tokyo) は、東アジアで初めての開催となりました。

会議は2019年11月12日～15日まで東京大学本郷キャンパス、JPタワー学術文化ミュージアムを会場としておこない、同16日には山梨県の博物館、遺跡などへの巡見旅行を実施して幕を閉じました。登録参加者は108名（うち海外参加者は16カ国から75名）。これに非登録の日本人一般参加者が数十名おられました。

会議では、西アジア新石器時代の石器研究に関する最新成果を持ち寄り、新石器文化の起源や発展について議論しました。全部で62本の口頭発表、16本のポスター発表があり、たいへん充実した会議となったものと考えます。また、石器製作実演、日本人が西アジアの遺跡発掘で入手した石器資料の展示もおこないました。さらに、日本列島と西アジアの比較についての講演を加えたのも特徴です。両地は、緯度がほとんど同じです。講演会では、両者が北半球中緯度温帯において狩猟採集民が氷河期末以降の温暖化にどのように適応したのかを比較検討しうる地域であることを論じました。

今般、PPN9-Tokyo 国際会議を成功裏に実施することができましたのは貴財団の御高配によるものと承知しております。ここに改めて深く感謝申し上げる次第です。